鹿児島大学法文学部紀要
「人文学科論集」第84号（二〇一七）別刷
二〇一七年二月発行

資料紹介

『昭和六年木脇藤次郎日記』（一）

丹羽謙治

資料紹介　『昭和六年木脇藤次郎日記』（一）

丹　羽　謙　治

木脇藤次郎（注1）（一八五九～一九三二）は玉里島津家の蔵書を整理した人物として知られる。その事績についてはかつて簡単に紹介したことがある（注2）。その際にも利用したものだが、本稿は、藤次郎最晩年の日記（鹿児島大学附属図書館木脇家文書）を翻刻して紹介するものである。なお、表題の「昭和六年木脇藤次郎日記」は丹羽が私に命名した。

『鹿児島新聞』昭和七年四月二十一日に掲載された死亡を伝える記事から藤次郎の事績を確認しておく。

市外唐湊の木脇藤次郎氏は去月卅日以来病氣静養中なりしが廿日午前四時五十分病気俄に革り七十四歳を以て卒去した

藤次郎氏は薩摩の武家故實其他藩の史乗に精しかりし木脇啓四郎藤淵翁の次男にて家兄早死のため家を嗣いだ明治八年大學南校に學び今の工學博士山田直矢氏等とは同學たり明治九年歸國し鹿児島英學校に入り年十九歳明治十年役に薩軍の戦兵として従軍し役後沖縄縣師範學校の習字教授書記を兼ね後ち鹿児島學校（造士館の前身）の書記、第五銀行、浪速銀行、十五銀行に奉職し老を告げて銀行退任後は専ら先考藤淵翁の事蹟編纂及び郷土史の研究に従ひ後進を指導稗益する處が多かつた若き時より書を巧みにし小松文雄氏と名を芳くし西郷南洲翁の墨蹟鑑定は麑城第一人者を以て許されてゐたなほ同氏の蒐集した史料は鹿児島史談會に於て校閲することになつてゐる…（下略）…

右の記事にもあるように、藤次郎は鹿児島市の郊外、中郡宇村唐湊（現、鹿児島市唐湊一丁目）に住んでいた。藤次郎の家は祖父祐長の代に藩から別家が認められた木脇家分家で、近くには本家（嫡家）もあった。昭和六年の正月の段階では、この唐湊の家に藤次郎とその妻の直（白石弥左衛門の娘）、三女の春子が生活しており、下女一名を雇っていた。この年、春子と伊集院兼清との婚約が成立、結婚式が行われる。長女の貞子は加治木町（現、姶良市加治木町）の宇都宮虎二に、次女の淑子は大口町（現、伊佐市大口）の医師であり考古学者でもある寺師見国に、それぞれ嫁いでいる。一方、長男の祐之は、鉱山技師として朝鮮に渡っているが、不況の影響で鉱山の閉鎖が決まり、この年の五月に家族ともども故郷に引き上げてきて藤次郎夫妻と同居する。祐之とその妻恭子との間には、祐順、祐信の兄弟がいた。一方、次男の祐吉は郷田家の養子となっている。祐之、祐吉は毎月父親に仕送りを行っていたことが日記から判明する。三男の祐利は、昭和五年に愛媛県大洲町で死亡した。

次に藤次郎の交友関係について触れておく。藤次郎とは年も近く、刎頸の交わりをしていた川村俊秀（中哉）が、この年の二月十日不帰の人となった。川村俊秀は、『薩藩と宝暦之治水』（上巻のみ、昭和二年刊）の著書もあり、最初期の鹿児島史談会にも参加していた郷土史家であった。日記では俊秀亡きあと、遺族の純二、祐三兄弟へ的確な助言をしたり、仕事の後片付けに気を配ったりする藤次郎の姿が見える。

玉里文庫の整理に象徴されるように、藤次郎は父親の代から玉里島津家と深い関係を続けている。蔵書整理はもとより、家扶の九良賀野幹とよく行を共にし、玉里家から依頼された郷土史に関する調査や筆耕などの業務に従事している。また、玉里島津家の侍医である中江佐八郎（国

年）とも深い結び付きを保っていた。その他、東郷重毅（示現流家元）、鹿児島県立図書館長の奥田啓市との関係も見逃がすことができない。

この日記を紹介する理由は、右のような藤次郎個人の業績や交流のありようを後世伝えるという点に留まらない。本日記が昭和初期の鹿児島の文化・経済・社会の状況を示す格好の資料だからである。たとえば、藤次郎が関与、出席した様々な行事。鹿児島市や鹿児島史談会などが企画する数々の行事のあり様が具体的に記されている。また、藤次郎は外出の折にさまざまな買い物をしている。日々どこに行き、何をいくらで購入したかが、日記には細目に書き込まれている。生活史の資料としても有効であろう。さらに、郷土の史料の蒐集という観点―当時、郷土史に関わる人たちがどのように郷土資料を発掘し、どのように資料と接し、どのように後世に伝えようとしたのかといった問題について考えるための格好の資料ということである。資料防災の観点から、過去の郷土史家の業績を顕彰しつつ、未来へ継承するための手掛かりとして重要なものであると考えられるのである。

（注1）藤次郎は通称を明治以後戸籍名として登録したもの。諱は祐充。これは、藤次郎の父啓四郎の有職故実の師である栗原信充の「充」の字を用いたものである。藤次郎の兄の弥太郎は諱を祐信と言った。

（注2）拙稿「玉里文庫と木脇藤次郎」（『国語国文薩摩路』54号、平成二十二年三月）

（付記）本翻刻は、ＪＳＰＳ科研費（１６Ｈ０３４７５）基盤研究（Ｂ）「鹿児島県の歴史資料ネットワークの実践と展開」の成果の一部である。翻刻を許可された鹿児島大学附属図書館に感謝申し上げる。

◇

【凡例】

一、木脇藤次郎の昭和六年の日記を翻刻し、紹介するものである。今回は、一月から三月までの三か月間を対象とする。

一、本資料は、博文館の當用日記（四六判）に鉛筆で認められている。同日記は、一頁に一日が充てられ、上部に「天氣」「寒暖」「豫記」「發信」「受信」の欄が設けられ、その下の本文記載欄は罫紙で十四行に仕切られている。今回の翻刻では、記載のあった箇所のみを翻刻の対象とすることとし、全く記載のない日については、月日と曜日のみ記載した。

一、漢字は原本の形に近い字体で翻刻した。変体仮名については、通行の仮名に改めた。当字については原文のままとした。

一、新たに句読点を付したが、清濁は原本のままとした。

一、挿入された文言は指定された箇所に入れ、挿入であることを示さない。また、抹消についても注記しない。

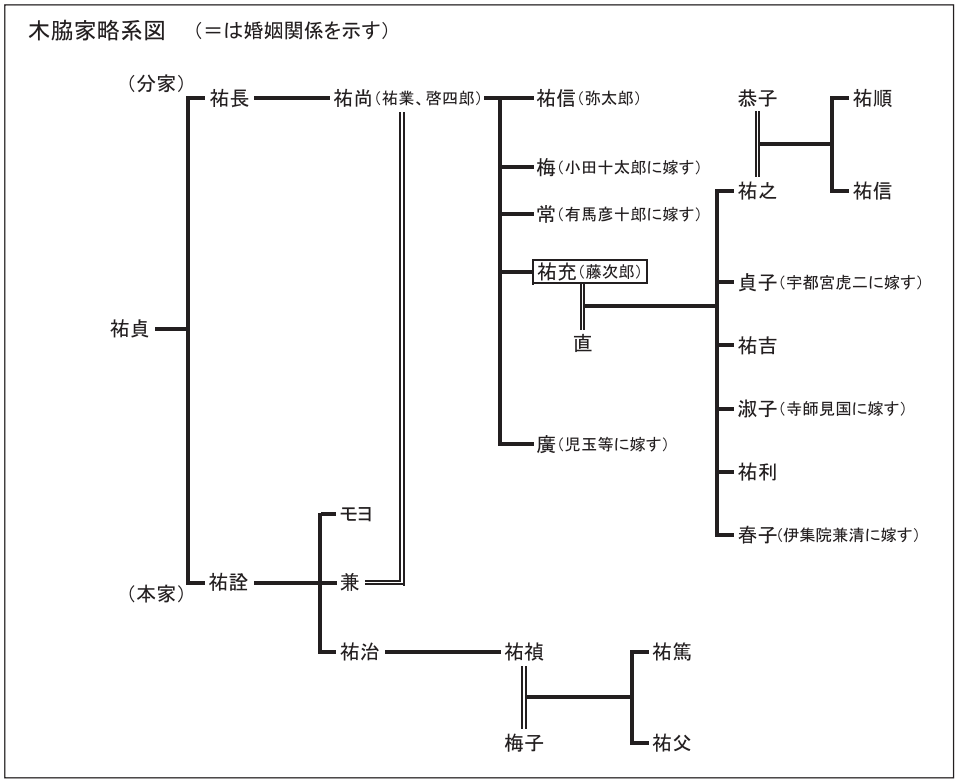
一、判読が不能な文字は、□とした。また、原文の誤字、脱字のある場合については、適宜右傍に（ママ）と記載した。

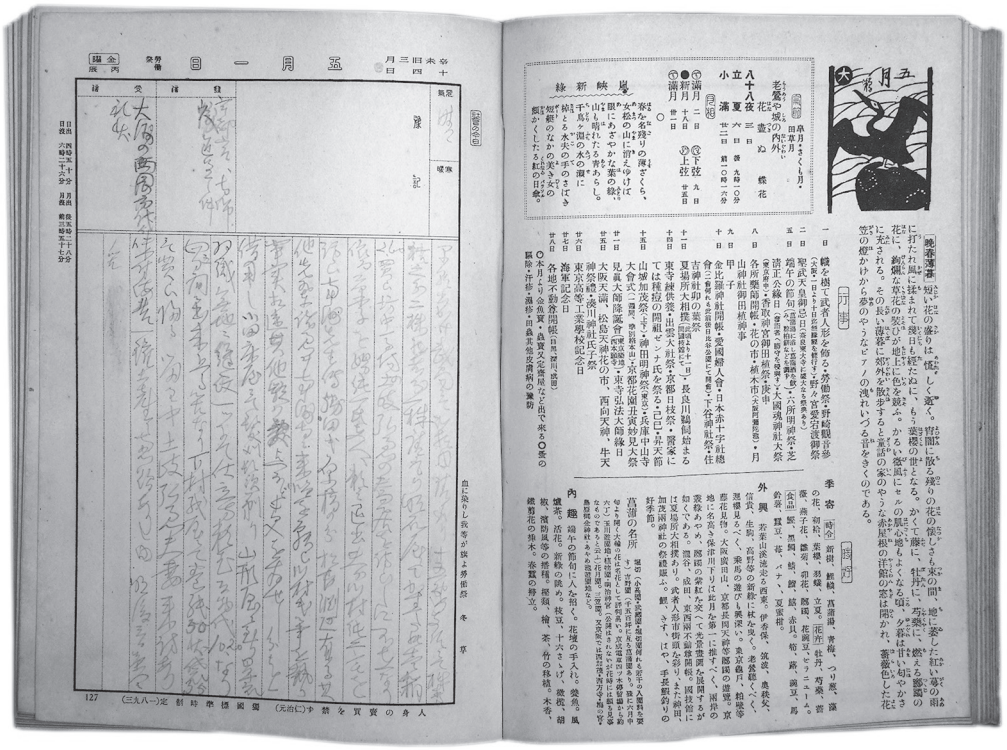
一、改行の意識が働いている箇所以外は、原文の改行に従わない。また、割書は（　）で表した。

一、［豫記］［發信］［受信］欄の改行は／で示した。

一、編者による注記は、※の記号と〔　〕で示した。

一、本文には、現代的観点から見て適当でない表現が見られるが、資料的な価値を考えて手を加えることはしていない。





『昭和六年木脇藤次郎日記』五月一日条（鹿児島大学附属図書館木脇家文書）

◇

一月一日（木曜）［天気］曇時々霧雨ふる［寒暖］暖

早朝、親子三人にて静かなる年頭の儀式を行ひ、祝盃を挙げ、終了後年始賀状の葉書書方なり。十時過出かけ、照國社頭の年始會場に至り、名簿を請取り社参を為し、夫ゟ磯御邸、玉里御邸に参上、祝賀を述べ、祝盃並に猪のお吸物頂戴し、帰途川村氏訪問、七十の賀盃を汲み、緩々話して夕方帰宅せり。

出がけ嫡家へ年始に行く。

一月二日（金曜）［天気］晴［寒暖］暖

午前、年始状書く。十時よりの共研舎新年會へ出席。本年八十歳に達したる高齢者、西郷與右ヱ門、田中雄蔵、伊地知隆清三氏へ紀念品贈呈。帰省会員歓迎會なとありて、退散。是枝、町田、熊野、白石、松下、有馬氏等回禮之上帰宅せり。出がけ東、園田、中江、白尾等の各氏へ参賀。有馬勇二、白石國彦来賀。

一月三日（土曜）［天気］晴　［豫記］午後ゟお静来る。

午前、永田湯屋、吉村、谷元、落合、山下等の湯場附近を回禮、夫ゟ武の佐久間、西田の濱田両氏へ答禮、夫より有馬彦太郎方、及湯地定敏氏へ回禮し、夫より荒田久保氏へ、夫よりお墓参りせしに、白石氏の國彦氏も来合はされ共に拝礼し、帰途に就き、唐湊部落内回禮し帰宅せり。白石周一氏来賀。宇都宮虎二、卓雄、哲子、琳子、健一、同断。児玉利之同じ。

一月四日（日曜）［天気］晴［寒暖］暖　［受信］祐吉ゟ自書／祐之ゟ振替25

春子を伴ひ、大口への土産品買に行き、朝日通にて別れ、玉里九良賀野氏を訪ひしに不在。奥さんへ来意を傳言して帰宅せり。夕刻九良賀野氏来訪。弥春子をい十院氏へ嫁かせることを内諾せる旨を傳へ、共に内祝の意にて一盃進ぜり。今夜土岐君迄書面出し、七日に電信内報之旨打合せし、期日は準備の都合上二月廿日後の事に希望する旨も直ゟ申込む。

一月五日（月曜）［天気］晴［寒暖］順暖

早朝、春子は大口へ養生の為め、予は加治木へ春子縁談一件相談兼年始の為め、十一時四十五分發の滬車にて出發。予は加治木にて下車し、用談賛成を得、御儀式に逢ひ、三時十五分發の列車にて帰宅せり。留主中、川村中哉氏来訪ありし由。夕方重信福子、是枝菊子（幸子連れ）、有馬のみよ子同道年賀に来り、各白糖一箱ツヽ贈與ありたり。町田氏叔父上の墓参をも為す序あるを以なり。

一月六日（火曜）［天気］曇［寒暖］暖

午前、武の湯に行く。午後二時より百四十七銀行階上に於ける故村野山人氏十年祭執行協議會に出席せり。湯地、伊地知、川村、池田、家村、予及主人側中村平輔、肝付藤四郎氏なり。夕刻帰宅せり。

一月七日（水曜）［天気］曇［寒暖］やゝ冷　［受信］寺師電

十一時前、大口より今朝四時男子生るとの電報あり。正午少し過、い十

院よりお廣、利之と男女の孫二人を連れ年賀に来り、お儀式済、昼食せしは二時頃なりき。三時過皆打列れ帰り行き、廣のみは夜入時分帰り来り一泊ス。予は三時過、西鹿児島駅へ行き、大口寺師氏へ男子出生の祝電を發し来る。
喜之助に頼み、山下へ下女用便所作り方請負はすことゝせり。

一月八日（木曜）［天気］小雨曇　［受信］祐之
今朝、廣子観兵式見物之為め出かけたり。今夜帰来せず。
昼頃、枝来りて下女部屋片付けを為し呉たり。

一月九日（金曜）［天気］曇後晴
山下大工来り、便所の材木等買ひ来る。五円七拾参戔仕拂ふ。製作方は自宅にて建る迄にして持参する筈也。喜之助へ明日二人計り来り地均しなどなす事を頼み遣はせり。正午過廣子帰り来る。昼前玉里九良賀野氏ゟ電話にて昨夜中山醫師帰麗ありし趣返答の良否を聞合せ、何日とするかを尋らる。午後十三日か吉辰なる旨を以て同日にする旨を返答せり。

一月十日（土曜）［天気］雪［寒暖］寒甚し
今朝より降雪終日停まず。夕方やゝ霽る。午後五時お廣、い十院へ帰り行く。
今日は朝ゟ晩まで火鉢の側に座したきりにて終日身動きもせすに暮せり。今冬季初めての寒さにて、軒のつらゝ手水鉢の氷等めづらしゝ。

一月十一日（日曜）［天気］曇　雪もよう［寒暖］寒
午後二時出かけ、玉里町九良賀野氏を訪ふ。樟脳試験場前にて奥様と行逢ひ、不在之上帰宅遅き旨を聞き、空敷引かへし帰宅せり。四時なりき。

一月十二日（月曜）［天気］曇　雪もよう［寒暖］寒つよし
九時頃、喜之助と小次郎、便所建設の地均し等に来て呉たり。壺や礎石、セメント等買に行く。五円持たす。おつり二円十戔。日雇賃二人にて参円遣はす。夜入迄かゝりし由。
余は十時出かけ、公會堂の故村野山人翁十年祭に出席せり。午前時間の餘裕あるを以て、新聞社池田氏と同行、問題の城山自働車道路の実地踏査を為す。幸ひ測量斑など来り居られ、主催者より種々釈明あり。豫定変更之上にて更に測定せらる処なりしならん。樟樹など九本とは世間の誤り、二本位しか邪魔なるものはなし。夫も一本は疑問として残さるゝ筈など話なり。夫ゟ下山、祭典無滞四時過終了。来合はせたる九良賀野氏と中山氏に計り、明日結納品取かわしの手續打合はせ、夫ゟ山形屋に至り、結納品双方の分を頼み、中山夫人も立合貰ふ。同所にて相分れ、電車にて高見橋下車、是枝菊子宅に至り、明朝納屋に至り、吸物、さしみ、取肴の用意頼み、八時頃帰宅す。

一月十三日（火曜）［天気］曇
九時出かけ、武局にて祐之の送金弐拾五円うけとり、夫ゟ中山氏に至り、正式に春子縁談承諾之旨返事を為す。九良賀野氏も立合玉はる。十一時過九良賀野氏と共に立出て、山形屋に至り結納品の準備出来しやを尋しに未だ也との事故、出来次第早く為持る様話し、九良賀野氏と別れ、久留陶器屋にてさしみ皿五客分、六十五戔にて買ひ帰る。菊子来り居り、

買物は四円六拾弐戔也。中山氏夫人結納持参。三時の豫定なりしも四時半迄も来られず。やう〳〵五時前来られ、式の通持参せられ、めで度受納せり。當方ゟの分も一緒に持参し玉はりし故、畧式ながら同夫人に託し、贈呈の手續を為せり。夜入過退出さる（時間の長引しは結納品の仕立方非常にひま取りしによりたるもの也）。間もなく菊子も帰り行けり。終日御苦労を掛けたり。過日来の懸案、一段落を告げ何となく安堵せり。傭女静子、風氣分にて妹を代りとして差出せり。

一月十四日（水曜）［天気］曇［寒暖］寒

今日は終日風氣分にて蟄居せり。

便所建方に大工昼頃ゟ取かゝれり。

枝来りて餅持参し呉たり。

一月十五日（木曜）［天気］晴

今日も終日不氣分にて引篭れり。大工今日も仕事なり。中々捗取らず、工程愚を極む。あちこち下知して改めさす。昼後彦太郎来り、夕刻帰り去る。竹をねだりしも未だ伐りし計りにて、使途さへ定まらぬに慾しゝとは余りに氣狂とは云ひながら無遠慮故、否やだとて拒絶す。

一月十六日（金曜）［天気］晴［寒暖］やゝ暖

［豫記］下便所落成

※便所土臺一式　2、900　※（以下、便所の経費のメモは原本では横書きで記載。）

右手間賃二人　3　000

材木類　5、700

仝　追加　、650

大工手間　10、00

2（ママ）1、35

5　00

16（ママ）35　総計

［受信］郡山彦さんゟ

今日も風氣分にて熱ある如し。引篭りて加養中也。便所大工、今日迄にて成就、手間賃拾円拂渡す。五円返戻せり。

加世田より女中来りし由、枝宅へ一泊。明日来り呉る筈。

竹ひしやく二ツ作れり。

祐之より例の通、百円送金あり。

大工手間五円なりし由にて返しに来る。

一月十七日（土曜）［天気］晴［豫記］下女交替［發信］大口へ

今朝不氣分を冒して図書館に至り、故島津長丸男其他の物故史談會員諸氏の祭典委員會に臨む。川村、池田、家村、田中、奥田、平田カ参集。更に来廿日九時半頃ゟ集り決定の豫定にて、十二時散會帰宅す。去ル三日より傭入れし小次郎娘、今日迄にて断り、加世田ゟ枝の姪女来り呉たり。名をみつと云へり。

出かける前、九良賀野氏ゟ電話にて、来ル二月五日に當地にて挙式する

考へ、都合如何と電報問合せありし旨通知せらる。いづれ相談の上と返事致し置く。昼帰り早々大口へ詳細書面したゝめ、錦江女学校前のポストに投函す。本日書道全集十一回分一円七十八戔、料金四戔、外に岡田式正座器、送料迄三円五十戔振替にて送金せり。

一月十八日（日曜）［天気］晴　［發信］九良賀野氏へ

午前、大工手間賃五円の処、十円うけとり居たりとて、返しに来る。夕方九良賀野氏息女同伴来訪、都合きゝに来らる。何分本人不在の事とて確答出来兼る故、可成は中旬頃迄に延ひ左様致し度との旨話し置く。夜入前帰り行かる。菓子一箱手土産なり。

一月十九日（月曜）［天気］晴［發信］電

今朝、大口へ電報打に西駅まで行く。午前春子、敏子同伴、帰宅す。食時過九良賀野氏へ遣はしあいさつさせたり。夜入方帰り来る。但、是枝氏に立寄り、明日買物立合方頼み置けり。

一月二十日（火曜）［天気］晴　［受信］船木、中島

午前九時出かけ、図書館に於ける長丸男祭典委員會に出席、正午退散。帰途中山氏に至り、弥五日に決定する事に取極め、電報する事として帰る。春子、敏子は菊子方へ立寄り、山形屋へ買物に行く。夜入過帰り来る。郵便局にて弐百円請出し、手許の百円と三百円為持遣はす。春子も中山氏に行きて談合せし由なり。

一月二十一日（水曜）［天気］晴　［發信］祐吉、（中島、船木）　［受信］熊野

今朝春子、敏子、菊子と山形屋へ買物に行き、あちこち品撰定、買入を為し、夜入過帰宅せり。彦太郎来る。藤田轍志郎、福岡より帰りしとて、なら漬一箱土産に持参。夕方迄話し帰り去る。

一月二十二日（木曜）［天気］曇　小雨　［發信］熊野

今日も風氣分。春子、敏子買物に出る。夜入過帰り来る。大部分の買物は終了せり。五十円手許へ、春子ゟ返却す。

一月二十三日（金曜）［天気］晴　［發信］祐之へ送金ノ件／町田枝子

今日、故長丸男祭典委員集會日なり。九時出かけ、図書館に至り、昼食無にて四時頃迄通知状等發送方也。九良賀野氏来館にて今夜會食之事を勧められしも、風の為他日に延はす事とせり。今日も残り買物に行き、夜入頃春子、敏子帰宅せり。

祐之へ祐吉同額位送て貰ふ事ヲ申遣はす。町田氏へ御禮と頼みの書状出す。

一月二十四日（土曜）［天気］雨曇　［發信］寺師

終日蟄居。昼過彦太郎来り、夜入過八時前迄長座、夜食喰ひつけ一泊でも仕度模様なりし故、帰りを促し、八時前帰り去れり。春子は敏子と同伴、町へ買物に行き、敏子は先に帰り来り、春子は王女會の先輩招待會に出席、夕方帰宅せり。

寺師氏へ、春子挙式の件、臨席の件、更に通知するなど申遣はす。

春子、敏子、町へ出る。

一月二十五日（日曜）［天気］曇　小雨　［發信］土岐

今朝、敏子買物に町へ行けり。敷ふとん、今一枚入用の為也。風氣分にて不快なりしも白石氏に至り、春子婚約成立、二月五日挙式に決定に付臨席の件頼む。周一殿不在。松下助四郎翁中風の氣にて半身不随、四五日前發病との事傳聞、直様戸口迄訪問三雄其他帰省之趣にて三雄と面會し挨拶を述べ、夫ゟ熊野氏春子殿主人加藤氏死去、昨夕春子殿母子帰着の由に付、弔問を為し、正午過帰宅せしに、九良賀野氏より電話あり。東京ゟ手紙来りし由にて、午後三時頃中山氏と同道、来訪の旨話ありし由。四時前両氏来訪。式其他に付、打合せの上、先方へ返事の要ヲ決定し一盃を呈し、夕刻前帰り去らる。

一月二十六日（月曜）［天気］晴　［發信］大口　［受信］祐之

加治木より電報にて山口氏令嬢死去の報あり。敏子昼前の瀘車にて帰り行く。予は図書館に於ける委員會に列席し、昼過帰りしに彦太郎来り居り、昼食中なり。間もなく早々帰り行く。図書館にて彦太郎娘ゟオルガン一件話ありしも、春子自身の物故何とも處分の方法ヲ聞かざる旨を答ふ。春子の話には、大口へ送ル事に約束して来たとの事なり。春子は午後髪結一件に中山氏へ行き、奥さん同道髪結女ノ処に行き、當日の事なと頼み、夜入前帰宅せり。

祐之ゟ三百円贈與の通知ありたり。

大口へ子供の祝品送呈す（よたれ掛と銘仙半反）4.80位なり。

一月二十七日（火曜）［天気］晴　［受信］小田安那

今日は終日在宅。ピート嬢来訪。午後五時頃、永吉町カ薬師町ノ邊、島津家住宅ヨリ上手川付之前処に失火あり。

一月二十八日（水曜）［天気］晴　［發信］祐之／祐吉／□□□□薬師町

今朝、是枝菊子夜具ふとん仕立かたなり。彦太郎来り、菊子の二娘、勇二の二娘も衣装見に来る。夕方皆帰り去り、お菊のみ今夜一泊。十二時迄夜具縫なり。

今朝、七郎来り自働車道路を通する為、道路擴張を計画したるに付、鐵道踏切の処、屋敷がゝり二十九坪九合丈地主中村武右衛門氏へ交渉方の件、大竹山氏へ申込み呉との為め来りしも、氣分悪敷、引篭り中に付、後日の事として彼の人々丈行く事とせり。

午前十一時役場へ税を三円四戔納入し、戸籍謄本一通下付方頼み置き、田上湯に入りしに、設備其他福迫の湯屋に比して数等下り、湯か温く十分のぬくもりも出来ず。早速帰宅して臥床して用心せり。夜風薬など飲で寝る。

一月二十九日（木曜）［天気］晴後曇　［發信］児玉ひろ／村役場戸籍係　［受信］祐吉、町田梅子／寺師見國

早朝より菊子縫かた試、荷造など大凡の事を終り、十二時頃春子と連立、町へ出行けり。間もなく敏子来り、また町へ行き買物して、静子か帰り、女学生へ頼み遣はす筈にて出かけたり。

一月三十日（金曜）［天気］晴　［受信］祐之、祐吉

今日追吊祭委員會に出席し、帰りに第百四十七銀行にて交換して貰ひ、若松にてつむぎを見て帰る。児玉ひろ昼前来り、加勢の為め宿泊せり。午後春子、とし子お墓参りに行。今日留守中、田中雄蔵氏来訪の由也。祐之ゟの振替三百円及祐吉ゟの三十円到達せり。

九良賀野、中山両氏ゟ春子へ錦紗壱反、祝とて恵贈ありたり。

一月三十一日（土曜）［天気］晴　［寒暖］暖く春の風也

今朝、春子親類等へ暇乞の為め出かけたり。早朝に田中雄蔵君来訪、明日の追吊會に案内を受けたるが、供物料でも呈するか振合もあるべしと尋らる。総て發起人で費用支辨するものなれば、夫にも及ぶ間敷、郷黨の先輩の参拝を賜はらば故人も感謝満足此上なかるべく、供物料など頂戴の豫筭ではなきも御供へ下されば難有頂戴する事になる可しと答へ、夫ゟ敏子と若松紬屋と山形屋に行き、昼食を喰ひ、夫ゟ買物なとして、敏子に持帰らせ、玉里御邸へ参上。序に九良賀野家に御礼に行く。御邸にて梅花見方中、中山氏夫婦、女子と春子と同道参邸し、宅に九良賀野氏と婚禮に関する打合せを為し、夕方帰宅せり。

出がけ祐之ゟの振替三百円は武局へ預ヶ入れ、祐吉ゟの三十円丈うけとりたり。山形屋にて、春子伐り貰ひし反物の裏及八揃買ひ、仕立方頼み置く。四日仕上げル約束也。

二月一日（日曜）［天気］晴

今日は故島津長丸男外五氏追吊祭當日に付、午前ゟ出かけ、出がけに中山氏へ立寄り、猶打合せを為し、図書館へ到り、祭典首尾克く終り、夕方帰宅せり。今日は旧暦十二月十四日にて義臣傳讀、共研舎ゟ通知もありしが、風氣分と疲労の為め早く就寝せり。夜、枝来り一泊せり。

二月二日（月曜）［天気］曇、夕後雷雨

今夕はい十院氏兄上の来着の筈にて、午前出かけ川添商店で□□ひとつ□買ひ7.80、若松商店にて紬（兼明氏贈呈用）7.50買ひ、共に為持貰ふ事に頼ム。夫ゟ川村氏訪問、同道玉里参邸の約ありたる為也。昨日の祭典にて疲労に付取止め故、一人参邸す。正午頃也。今日は練兵場にて戦車の運動状況見物の為、非常の人出にて大にきわい也。御邸てもお物見を開かれし為め、思ひ〳〵の人々押込み来りて、梅拝観かた〴〵大雑沓なり。事務所へ押上り机上にありしかるかんまんぢう勝手に食ひ居し人は山口新吉、家村助太郎両氏なり。其他平素参邸せぬ人なども（濱田等）押上り来り、無遠慮ぶしつけ千萬也。夕方帰宅せしに、武十文字の邊より雨ふり出し、大雷雨となり帰宅せしに白石載秀殿、お兼、きよ子、さち子来り居、夜入頃雷雨を冒して帰り行きしに、幸に雨小降となりたれば、途中やゝよかりしならん。

二月三日（火曜）［天気］晴　［發信］加治木／大口

今日は祭典費精算の為、委員図書館へ参集、十一人なり。悉皆結了、御禮挨拶状等残りし丈なり。夫ゟ中山氏に至り兼明氏とも面會、諸事打合を為し、照國神社へ同道し、式の事など談合し、夫ゟ鹿児島新聞社の委員會に出席して帰る。彦太郎来り居、今夜は家内中にて分袂の宴を為し、彦太郎へお菊宛の手紙を出し、式場と宴會へ出席の豫告を取消す旨を申遣はす。有馬氏へも通知方頼ム。九時頃有馬氏文子、為子の両人来り、

祝物恵與せらる。枝母子来る。
兼明氏便にて東京土岐弘氏より海苔壱罐恵與ありたり。

二月四日（水曜）［天気］曇

二月五日（木曜）［天気］晴　［受信］祐之、祐吉／寺師等の／祝電来る
今日春子結婚式に付、早朝自動（ママ）道路の修理を為す為め、喜之助来り呉（四臺、車代一円拂）、予は視察かたぐ〳〵出かけ、武局にて弐百五拾円うけとり十五銀行支店にて新敷札百円丈交換し貰ひ、中山氏に立寄り、時刻等打合帰宅せり。加勢に菊子、納屋の買物なとして来り呉る。午後二時過、媒酌人中山夫婦迎に来られ（自動車二臺）、式場照國神社々務所に至る。兼明氏は九良賀野氏夫婦、川上氏夫婦等出迎はる。夫より式に関スル説明あり。余り繁雑の式法にて皆抜けありて跡にて大笑ひとなれり。了りて庭前にて寫真撮りありて鶴鳴館に至り、五時比より披露の宴あり。亭主側は兼明氏、川上氏、石田博士、上原宗一郎氏、中山氏、□□氏、川上氏夫人坐し、客方は予、白石周一氏、寺師見國氏、九良賀野氏、春子、中山氏夫人、児玉ひろ子、白石夫人、九良賀野夫人坐し、格（カク）之如く、開宴（六時也）、挨拶。一同充分歓喜之裏に、十時過退散。自動車にて各送り付けなり。新郎新婦及兼明氏旅宿は龍潜館に引上げなり。出發は明六日午後十一時の事に極まり、仲人及自宅来訪丈に止め、不遠内外國行の節ゆる〳〵往訪の筈なり。彦太郎二回来ル。

二月六日（金曜）［天気］晴　夜雨
午前電話にて今夜の出發は八時十五分の事に変更の通知あり。故に藤田と敬愛幼稚園の野村嬢に電話にて通知せり。一時頃い十院夫婦来訪、昼飯を饗し五時前迄緩々庭内や丘上等散策して帰り行く。敏子今朝昨夜の相談等携へ帰柁し、再ひ午後来りたり。夕刻児玉ひろも伊集院へ帰り行。予は七時頃より敏子を伴ひ、鹿児島駅に見送り鹿児島駅に見送りを為す。駅には兼明氏始め川上夫婦、石田博士、上原氏、中山、九良賀野、白石三夫婦やフヰンレー、ピート両教師、野村、柿園其他の教會や會友、藤田一家四人、是枝菊子、靖子等多数見送りあり。西駅迄同車見送りしは、予と敏子、菊子、九良賀野夫婦、兼明氏、藤田の四人等十余人、西駅へは有馬ノ二娘、是枝の二人等にて中々華かなる出立なりき。
折詰一個、菓子二切、茶少々つゝ、熊野、有馬両家、是枝、押川、重信の六ヶ所に祝の御禮として贈呈せり（枝、使なり）。

二月七日（土曜）［天気］晴、風ふき起る　［寒暖］寒
朝より疲労の為め、予夫婦、敏子とも身動きもせず、静養中なりしに、い十院兼明氏、昼過来訪あり。有合の肴にて酒出し、夕方まで飲みて帰らる。

二月八日（日曜）［天気］晴、風ふく　［寒暖］寒つよし
昨日の約束に依り、兼明氏旅宿に正午到りしに、不在なりしも暫時待ち、帰来。夫ゟ酒飲み三時比自動車にて高見橋近傍の後醍院氏に案内し暫時歓談し、竹會社前にて別れ、再ひ町へ出、大坂屋にてかるかん四切40、愛甲にて折詰60一個買ひ、川村氏に禮として贈與し、やゝしばらく談話

之上帰宅す。天文館角にて安楽散一円の分買ひ帰る。敏子、午前町へ出で、午後帰柁せり。

二月九日（月曜）［天気］夜来の寒雨終日　［寒暖］寒　［豫記］川村發病／兼明氏出發

今日は疲労の氣味にて朝より蟄居せしに、昼過、川村の二男走来り、今朝十一時頃中哉老病氣再發に付来り呉れ度しとの事故、早速どてらの儘合羽ヒツカケ出懸んとする処に、玉里ゟ電話なりとの事なれば出て用件尋しに、今日兼明氏帰東の途に就かるゝ筈にて、是非何処にてか面會之上重要件話し置き度希望故繰合せ来り呉度との事なれども、川村氏の容態迚も他に逃し難かるべきに付、不得已謝絶したしと返事せしに、左様傳へ置くべけれど、可成一時でも繰合呉れば幸なりとの事なりし故、其儘飛出し川村氏を見舞ひしに、人事不省、たゞスヤ〳〵息の通ふのみ。夕方九良賀野氏自動車にて川村宅へ迎に来り、一時間位迄よろしければ直く来り呉との事にて、青柳楼に誘引せられ、兼明氏も来會、媒酌人中山氏の失態一件を陳述、不信用極まる人物故親しくつき合はぬ様して呉との事也。十時頃迄のみ、再ひ自動車にて川村氏を訪ひしも、乍然たゝ自然覚醒を待つのみ、他に方策なし。依て辞して帰宅せり。

二月十日（火曜）［天気］曇　［寒暖］やゝ暖　［豫記］川村氏今暁四時永眠　［發信］祐之、祐吉、虎二へ、川村氏の訃を通知ス

早朝川村子息来り、今暁三時四十分頃中哉老不帰の客となりしを報ず。祐之と祐吉と虎二どのへ一筆はがきにて通知を發す。夫ゟ川村宅へ至りしに、今夕茶毘に付し、十二日南洲寺にて四時ゟ五時迄の間、告別式執行の事と定まり、四時出棺、境脊戸火葬場に送り行き、思ひ〳〵退散帰来せり。

葬儀は紀元節を避けたしとのいぢゝ氏の動議にて、十二日に挙行のことゝなりたるが、予は紀元節は天長節とは違ひ祝ひ日と云ふには少しく意味を異にする故、十一日午後にしては如何と異見を陳べしも、誰も賛否を表するものなく、ズル〳〵にて十二日とする事になりたり。

二月十一日（水曜）［天気］晴

今日は風氣分にて終日引篭り静養せり。夜九時前川村氏二男、今夜来訪せぬ故如何の重体なりやと聞に来り（肝付氏の差圖なりしとの事）、如何にも通夜の催促に似たり。依りて今夜は折角養生し、明日の諸用を達し度考へなれば、宜敷頼上る旨答へて帰へす。

二月十二日（木曜）［天気］小雨、夕に到りて其度を強む　［豫記］沖氏夫人長逝のしらせあり

今日は川村氏告別を南洲寺にて執行の筈に付、昼食早々南洲寺へ出かけたり。告別式は四時ゟ五時の間と極まり居りしに、新聞に三時ゟと發表ありし為め、参拝者二時ゟ詰めかけ予定に狂ひを生じ、遺骨の寺に到達も後れ、僧侶も揃はす、誰も取り切りて斡旋するものなく思ひ〳〵たゞ重もなる人には座敷にて雑話に耽り居り、やう〳〵讀経等も四時頃に至り開始され、式終りても發柩何の為めか非常に延引し、雨は降る、予は一足先に立出、電車にて涙橋に至り、薄暮共同墓地に至りしに子息二人、甥一人、其子二人と伊東恵聰氏参着し居り、折角墓穴を堀りつゝある処

なりき。先代の墓石臺石の下部を少し□に堀り下げ、夫婦の遺骨を安置し埋め込めり。下よりは大人の大躰骨の如きもの抔幾つも出しを見受けたり。之も一緒に埋め讀経あり。拝礼して帰途に就きしは足もと暗き頃なりき。予は例之通、涙橋より電車、田上境迄バスにて帰宅せり。彦太郎来りし由。

二月十三日（金曜）［天気］　雨

今日も終日風氣分にて引篭りたり。前日来の雨、終夜終日降りつゞき霖雨の如し。

二月十四日（土曜）［天気］小雨　［受信］兼清、春子両人ゟ

今日も雨霽れず。昼、是枝菊子来る。御禮として拾五円贈與せり。今日兼清夫婦、豆州新古奈温泉に於て十日夜認めの信書到達す。十一日帰京之筈とあり。豫定通りに着京せしものなるべし。

二月十五日（日曜）［天気］　晴　［發信］桑原氏へ

今日沖雄熊夫人葬儀當日に付、加勢かたゞく九時過出かけ、是枝氏へ髪結道具返却に下女をつれて立寄り、同家にて別れ、清水町に至り、三時迄加勢、出棺と共に浄光明寺の墓地に至り埋葬に列し、終て順路帰宅せり。

重信吉十郎外一名来訪ありし由。

有馬俊秀氏、弟の究口児を伴ひ来訪せられし由。

二月十六日（月曜）［天気］　雨　［受信］兼明氏

川村氏一周日なる故、和尚、中江氏等来らるゝ筈に付来て呉ぬかと祐三使に来る。風氣分未だ勝れず、雨天には用心する方よろしく考へるから、乍不本意謝絶する旨返答し、且團体や遠方よりの供物料に對しては受取証發送方注意し置たり。午後川村純二来り、臺湾の姉の土産なりとてバナヽあめ一箱持参。種々今後の處置につき尋られしに付、大躰の件は話し置、近日いぢゝ、湯地、中江等の諸先輩に御禮かたゞく参りて何分よろしく御頼申上る旨願ふ方可然、但し一寸先方の意向を伺ひ知せると申置けり。

兼明氏ゟ着京の旨はかき到来せり。

二月十七日（火曜）［天気］　雨　［受信］祐吉ゟ

今朝重信吉十郎氏、當時宮崎市淀川町居住の山産物商桐原庄之助と云ふ人を同伴し来訪、南洲先生書翰の鑒定を乞はる。「彰義隊暴れ三人散歩に出て夜入ても帰らず尋ねさせたら別紙之通の始末ゆえ督府ゟ届書を出せとの事なりし故別帋之通申出置たり。猶肥前藩でも同様のことあり、押掛けるとの事なりしも私闘に陥入てはならぬから命を待て行動せよと漸くながら引留め置、當御方の儀も同断なれども御沙汰ある迄忍び居る場てある、追付け打散らして鬱を晴らし可申と」大久保一蔵名宛、日付なしなれとも中々よろしき様なり。往々墨のかすりたる処もあれとも、墨つきの点など申分なきが如し。至極結構なりと答へ置けり。

二月十八日（水曜）［天気］晴　［寒暖］冷　［豫記］振替三通出す　［受信］祐之ゟ

久し振雨霽たる心持せり。九時頃出かけ、武局にて弐拾円うけとり、聲

教社、平凡社及河合洋行へ合金七円八拾戔拂込（振替）。夫より若松つむぎ店にて大島二反（中山氏夫婦用19.50）地紬壱疋（九良賀野氏用15）合計参拾四円五十戔也仕拂ひ、夫ゟ中山氏に到り品物を贈與し、夫ゟ安楽散1.00と末廣.65とを買ひ、玉里九良賀野氏留守宅に至り、令閨へ御禮品贈呈し御邸に至らんとせしに入口にて九良賀野氏と出會ひ、同道にて石燈篭にて互に分袂、魚芳にて白雪一升注文、一円八拾戔拂ひ配達頼み置、武にて豚五十目20買ひ来る。宅近邊にて川村子息に出会ひ、再ひ同道して帰宅す。四十九日法事香料贈與の方々へ禮状出し方の案文など協議し、忌明御禮之節是非御願する事に注意を與へ置く。明日四十九日法要営むに付、四時比ゟ来て呉との事也。

二月十九日（木曜）［天気］曇　［豫記］戊辰紀念會、四時よりいろはにて、会費一円。川村氏四十九日法要に参り不参せり。午後彦太郎来る。竹を貰ひ度しとの事に付、一本切れとて指定し置。三時半出かけ是枝氏へ立寄り、扇子昨日買ひし物を以て返却し、夫ゟ川村氏に至り拝礼を済ませ、夜入過まで宅に談話を為し、齋の饗を請けて帰る。南洲寺和尚と予と親戚の伊勢貞太郎氏、黒葛原宏の子供二人、外に一人（近所か親類カ）老婦人一人なりき。

二月二十日（金曜）［天気］曇後小雨　［寒暖］寒　［發信］松崎鶴雄　［受信］松崎鶴雄

終日家居。午後、川村純二忌明御禮に来る。

二月二十一日（土曜）［天気］小雨　［寒暖］冷　［受信］春子ゟ細書／松崎鶴雄ゟ川村氏吊詩／おくん、十次郎ゟ市来花子の訃告

午前武の湯に行く。久し振氣持よろし。

浦和の市来嘉求摩氏の三女花子、十七日朝死亡之旨、おくんと高連名の通知はがきとゞく。

二月二十二日（日曜）［天気］晴　［發信］山下善六郎／松崎鶴雄（は）／春子へ

今朝下女暫時暇を貰ひ町の知人の処へ行き、正午過帰来。十時半頃、白石周一氏来訪、正午帰り行かる。四時頃、川村の娘二人来り、位牌の字を書て呉と持参せしに付、夫婦の戒名を表面に、死去年月、年齢と俗名を裏面に書き込み渡す。廿五日夜の急行にて台湾へ出立之筈之由。

二月二十三日（月曜）［天気］曇　［發信］市来嘉求摩へ／土岐氏

昼前、園田才治君来訪。正午帰り去らる。川村氏遺族今後の生活、經済関係を尋ねらる。平素金銭上の件は御互に話さぬ事に約束して交際せし故、不明なる旨返事せり。昼後町に出て武局にて弐円の小為替振出し貰ひ、市来氏へ香奠として郵送せり。紬屋の下、下川三次郎商店にて鰹節五本、紙箱入として小包にて東京土岐弘君へ送呈せり。春子の御禮かたゞ〳〵也。

二月二十四日（火曜）［天気］雪雨降、後晴れ、風強し　［寒暖］寒冷　［受信］猪肉とゞく

昼前川村の祐三来り、今夜七時半ゟいちゝ、湯地、中江、和尚打寄相談

事ある筈に付、来て呉との事なり。行く旨返事す。
一時頃、女祈禱師ら敷者来り、行きなり、竈に向ひ祝辞か何か高聲に讀上げしに付、此内では神も佛も入らない、又他人を頼て祭て貰ふ必要なしとて追拂ふ。二時前、電氣會社ゟ集金に来り二円拂ふ。
今夜食後七時頃出かけ、平の町の川村氏に集合せり。
伊地知峻、湯地定敏、園田才治、中江佐八郎、南洲寺和尚の伊東恵聰諸氏と予の六人にて、川村兄弟と伊勢貞太郎氏室人、彼三之今後取ルべき處置に付大体の協議を遂げ、十一時頃帰宅せり。夕前、朝鮮より猪肉とゞく。早速調理し晩酌、夕飯の菜とせり。

二月二十五日（水曜）［天気］晴　［寒暖］寒冷　［發信］祐之へは書
正午過、下女を伴ひ有馬勇二宅へ衣物返戻、みよ殿の病氣見舞に行く。小路の角菓子屋にてかるかんまんぢう.85買ひ持参せり。夫ゟ白石氏に至り、五日鶴鳴館行の自働車代一円と猪肉少々呈上せり。夫ゟ武駅通西駅迄下女同行。夫ゟ明石屋に至り、鹿麗餅壱箱注文、東京町田經宇氏へ郵送方頼み置き、かるかんまんぢう1.30買ひ、川村氏を訪問し、今夜台湾へ出立の令嬢二人の途中用に呈し、且つ駅に見送りは御免を蒙る旨申残し、帰途上野篆刻師に立寄り暫時談話し、夕方帰宅せり。　二人連の客ありて懸物ら敷もの持参ありし由なれども不在の為め、空敷帰り去られし趣なり。
下女の郷里ゟ友達一人来り泊る。

二月二十六日（木曜）［天気］曇時々小雨　［寒暖］寒冷　［受信］婚禮寫真二枚とゝく、寺師よし子ゟ
午後女中のいとこと云ふ者来り、昨日より宿泊中の友達を伴ひ行けり。今日寒さの為め、何処へも出ず。川村祐三来り、昨夜姉妹及伊勢氏出發帰台ありし由にて、暇乞の代人としてなり。
田上女子青年團青年後援の敬老會ヲ、三月一日午後一時より下公會堂に開催するに付、案内状を女子二人にて持参せり。直一人丈出席の旨返事せり。

二月二十七日（金曜）［天気］晴　［發信］町田經宇氏へ
昼過出かけ明石屋へ行き、注文の高麗餅壱箱發送方頼み3.64拂ひ、大社酒店にて特製福娘二升為持方頼み4.40拂ふ。夫ゟ田島寫真館へ至り、春子夫妻の寫真焼増四枚頼み、4.00拂ふ。夫より川村氏に至り、夕方點燈時迄書籍原稿数整理分類を為し帰る。
舎費.20と新聞代1.50拂済。

二月二十八日（土曜）［天気］晴　風強く　［寒暖］寒し　［受信］祐吉為替
今朝七郎来り、大竹山氏に、岡武右ヱ門へ土地寄附の承諾を得置きたるも、一応弟へ話した上承諾書に調印するとの事なれば、明朝大竹山へ至り其旨頼み呉との事に付、承諾す。午後彦太郎来り竹の一部持帰れり。藤安、吉留、窪田、本月分仕拂済、下女へ七円渡す。祐吉ゟ例月の医費到達せり。

三月一日（日曜）［天気］晴　［寒暖］やゝ暖　［豫記］敬老會、

午後一時ゟ田上下公會堂にテ
今朝九時頃大竹山氏へ行き、兄武右衛門氏の調印の件頼む。對談中、永田と七郎来り、共に頼み、帰りに門前にて両人に別れ、武の湯に入り帰宅せり。大分縣人と云ふ某氏、例之南洲先生書幅持参、鑒定を乞はる。一行「和平氣象怒中看」ナリ。ダメ也。其旨答へたり。是迄三四幅持参ありしも皆一も好きものなし。氣の毒なれど致し方なし。一時より敬老會に行く。長々しき講演、御説教二ツ、挨拶にて、六時頃やう〳〵茶菓、肴、壽し等御馳走出で、しばらくして徳岡老帰り去られし故帰途に就く。

三月二日（月曜）［天気］晴　［發信］祐吉へ、は
終日在宅、下女の父来る。

三月三日（火曜）［天気］曇　後小雨　［寒暖］冷
昼前、田中兵輔氏、妻君リヨウマチス氣分故、湯入に連れて来たとて来訪。しばらく話し去らる。

三月四日（水曜）［天気］晴時々霧雨来る　［寒暖］やゝ暖　［發信］松崎氏と平凡社　［受信］兼清、春子
前夜の雨快く晴れたり。九時過川村祐三来り、去一日に稲荷町一七三へ轉居せし旨しらせ呉れたり。
午後出かけ武局にて祐吉の送金参拾円請取り、十五銀行支店に行き、一株の公賣代金四円八拾戔請取ルべき通知書及受領證に調印して差出せしに、支店では拂渡出来ズ、拂込未済に籌して計筭あるならんとの事なりし故、強て支店經由受領証ヲ本店へ提出ありたしと押付けて、帰りに田島寫真館にて焼増四枚うけとり、初市にて起上り小法師三ツ.05買ひ、下村商店にて紙類1.05買ひ入れ帰宅す。金丸にてバナ、.26買ひ来る。

三月五日（木曜）［天気］曇　［發信］祐之、祐吉／乕二、見國／寫真及はかき
昼後午後一時半、下女連れてお墓参りに行く。夫ゟ図書館に於ける島津長丸公外五氏祭典決算報告會に出席。伊地知、市来、平島、落合、家村、田中兵、平田猛、奥田、池田と予迄十人なり。帰途伊地知氏の誘引により、家村氏と三人公會堂食堂にて夕食済ませ、別れて郵便局に至り寫真發送を為し帰る。九時前なりき。
池田、家村、市来、樋渡の四氏に川村氏擔當の諸事務を取扱ひ貰ふ事となりたり。

三月六日（金曜）［天気］曇後小雨
今日は貴族院議員藤安茂次郎氏の葬儀、鹿児島朝日新聞社の社葬執行に付、午後二時出かけ、告別を為し、直ちに帰宅せり。三時頃より霧雨降り出し、漸次降り出したり。當地稀有の盛葬儀なりき。香料弐円を供へたり。

三月七日（土曜）［受信］町田梅子

三月八日（日曜）［天気］晴　［受信］貞子、春子／鹿新社ゟ香奠
□□
午前十時頃出かけ、草牟田墓地に至り、手水鉢の体裁抔見図り、入口角

の石工方にて二尺に七寸五分の棹石、河頭石にて二十円位、手水鉢十二円位との事なりし故、一段に約束を為し、寸尺を確定し再約スルコトヽシ、夫より図書館へ至りしに、寫字料費四十五円位残り居る故、何か見出し呉との事なりし故、川村氏関ヶ原合戦始末遺稿が結了し居らば、浄書せしめ置く方よろしからんと考へ、稲荷町戸越トンネル上迄行き調べタルに、幸に全く出来上り居タルに付、純二氏に話し、承諾を得、同人中江氏迄届ける事に約束し、帰途小杉薬舗にて海貴来四円の分買ひ入れ持帰る。留主中、玉里御邸の九良賀野様来訪ありし由なり。川村純二も同断なりし由。

図書館へ持参せし細川、永井両氏談話筆記は自分で寫スヿに約束し持帰れり。

三月九日（月曜）［天気］曇　［豫記］日本画大成申込む　［發信］田尻氏へ悔状　［受信］土岐弘氏禮状／田尻種經氏母堂の訃

午後二時出かけ武局にて二円の小為替振出し貰ひ、田尻氏に香奠として送呈せり。今朝母堂の訃を報知ありしに因る。夫より山形屋に至り、寺師氏へ御禮の無地御召一反13.50にて買ひ、夫ゟ吉田屋書店にて日本画大成豫約ノ申込を為し、夫より新石段ばゝにてコンブ三種、イリコ餅買ひて帰る。

細川筆記寫済。

三月十日（火曜）［天気］曇　［寒暖］やゝ冷　［受信］よし子は書

午前中役場へ税金拾九戔納付せり。

三月十一日（水曜）［天気］晴　［豫記］今夕大雷雨／霰積みて雪の如し　［發信］寺師見國／併セテ小包發送　［受信］史談會は書／十五日伊地知氏／にて會合通知

午前十時前、下女を連れて押川氏を見舞ふ。病人余程よろしき風にて、しばらく枕頭に坐りて四方山の話などして退去せり。玉子拾五個土産とす。夫ゟ下女は帰らしめ、西田郵便局にて大口送りの小包を頼む。書状もポストに投ず。夫より中江國年の宅訪問す。川村氏の関ヶ原草稿未た純二持参せず空敷帰る。途中、山内弘氏に行逢ひ立話長くして別る。上野江山印刻師へ立寄り暫時話し帰る。ナフタリン粉一袋28とアイフ一60海津店にて買ひ、豚肉五十目25買ひ来る。押川篤行、京大英文学科へ入学許可の通知ありたる旨、七高ゟ通知状来り居、大よろこびの体也。誠に結構之事にて悦申入れ置く。来十五日二時ゟ伊地知峻君宅にて史談會開會の通知はがき来る。

三月十二日（木曜）［天気］晴

午後〇時半出かけ、図書館に至り、中江氏へ川村の原稿来り居るや否やを尋ねしに、未だなりとの事、館長へ川村氏秘蔵の薩藩御達留を寫し方、所蔵者の承諾を受けて謄寫する事の打合せを為せり。館長も至極賛成なりき。又十五日の伊地知氏宅に於ての史談會に出席の事も申込み置けり。夫ゟ副業品即賣展覧會を陳列所に観覧したり。檳榔樹の根の火鉢八円と六円の分あり、相當大なるものにて欲しく感ぜり。

三月十三日（金曜）［天気］晴　［發信］い十院兼清清、仝／春子［受信］い勢貞太郎／小田かつ子／松崎鶴雄

午前川村祐三、関ヶ原合戦記の原稿持参せり。午後右を携へ図書館に奥田館長を訪問せしに、相談の結著し出版する事となるべきに付、當分預り置き呉との事なりし故、持帰る。帰途副業即賣會場へ行き、種子鋏小25戔にて買ひ来る。図書館に行がけ山形屋にてスレッパー一足75にて買ひ、図書館の下足婦人へ預け置く。

三月十四日（土曜）［天気］晴、黄砂降　［受信］恭子

終日在宅。昨日来の黄砂、天を覆ひ、終日濛々たる天氣なりき。午後彦太郎来り、暫時にして帰り去る。

三月十五日（日曜）［天気］晴、風ふく　［豫記］午後二時冷水町伊地／知峻氏宅にて史談／會開催／加治木男子生る　［受信］よし子

今日は午後より史談會中興發起の意味の會合に冷水伊地知氏邸に至る。會するもの二十人位なりし。先づ伊地知氏主旨を陳述、發起の承諾を求め、夫より池田、家村氏等委員として簡単なる會則を撰定、次會に提出することゝし、夫ゟ平田猛氏、吉野村史蹟に関する建碑一件を話し、矢上城趾には獨力で建設せし旨を陳べ、村で村史カを編纂する積りなるも捗取らぬから自分が先づ其目録見た様のものを出版することゝし、代金参拾戔にて頒つと云はれし故、一部申込を為し、其内の一節、岩切信夫氏が丁丑役に熊本にて乃木将軍の聯隊旗奪取當時の実話筆記を平田氏讀上げ、一同謹聴せり。夫ゟ宴に入り、サツマスシなどの饗あり。八時過散會せり。會費は五十戔つゝなりき。今夜女中活動見物に出る。

三月十六日（月曜）［天気］晴、風つよし［寒暖］暖　［發信］祐之へ細書／發送ス　［受信］寺師氏／帋二氏　男子出生

午後副業即賣展覧會に行き、先日来欲く思ひしビロの木の根の火鉢、壱個七円にて買ひ取り、十五支店に行き磯太郎へ頼み取寄せ、宿直部屋へ頼み置き、株券競賣代一株分四円八拾戔うけとり帰り、熊谷酒店に立寄り、沢の鶴一升二円二十戔持参頼み、指物屋米倉國松に至り火鉢の手入頼みしに、同人も三個陳列の内より一ツ買ふたとて手入最中也。大阪へ注文するから一しよに申遣はしてもよろしとの事なりし。之は中の火入れ鉢の事かと思ひし故、可然頼ムと托して帰る。同人の話には、立派に仕上けすれば五拾円の價値はあるとホク〳〵の体なりき。

午前中、重信吉十郎氏来訪。先日持参ありし南洲先生書翰の件話ありし故、不審の点所々あり、多分他筆ならんとの評あり、自分も不審の点二三を揚げて申置けり。

三月十七日（火曜）［天気］夜来雨後晴　［受信］寺師氏、薬

終日蟄居。

三月十八日（水曜）［天気］晴　［受信］市来嘉求广／よし子

午前、七郎、永田、今一人（河内カ）来り、集合、自働車道路問題に付、□□地代半額仕拂方申入に付、寄附に拠り支弁し度、五円負擔し呉との相談あり。承諾す。午後、武の湯に行。夕方、川村祐三来りて姉カツ子の容体危篤ノ旨ヲ告ケ、明日来て見て呉との相談なり。承諾す。

三月十九日（木曜）［天気］曇　［寒暖］暖　［發信］寺師夫婦□　［受信］市来小包

午前出かけ、武局にて弐拾円引出し、夫ゟ中江氏へ立寄り、川村娘の容体を聞きしに、昨夜死去との事なりき。夫より兎に角川村氏に至りしに、伊東和尚来り居、暫時にして帰り行かる。後清水校長等来吊、またいぢち峻君も吊問あり。予は親戚野元氏其他多人数来合せ居り、別に加勢すべき事なき故、三時過暇乞して帰り来る。葬式は明廿日午後四時との事なり。

三月二十日（金曜）［天気］晴　［豫記］故川村氏長女／勝子の葬式

早朝百四十七銀行の使、湯地頭取の使として来り、今日銀行迄来り呉との申入あり。午前中参上すべしとの返事を為す。朝食後、永田と七郎来りて集合、自働車引込に付寄付地所一件交渉の為、中山多計士氏へ同行して呉れとの事なりし故、同行して同氏宅に致し、伊地知氏土地八歩の半部を寄付、半部を時價譲り受の相談を為したるに、換地の手配をして居る者の申出さへあらば異議なき旨の返事を得、別れて百四十七銀行に到りしに、南洲翁書幅（昨年吉田書店にて見たる久米田氏所有のもの也）鑒定を乞はる。全く真物なる返答をなし、昼食の饗を受け、夫ゟ図書館に至り、桐原氏の南洲書翰の文句見合せの為め、加治木氏著の南洲書翰集を一覧せしに矢張り前後なき文句なり。たゞ五月一日の日付あるが相違なり。果して採用されし原書が真物なりしや疑を生ぜり。夫より川村娘の勝子葬式に参會し、五時出棺、自働車にて境瀬戸の火葬場に至り、托して帰途に就く。鴨池入口にて車を卸し貰ひ、農事試験場内を貫通の道路を観察しつゝ薄暮帰宅せり。

三月二十一日（土曜）［天気］晴　［寒暖］暖

今朝、下女召列墓参を為し、墓石の寸法等測り、下女は帰宅せしめ、予は涙橋に至りしに、電車今通過の場合に付、鴨池まで歩行し、夫より電車にて草牟田墓地入口石切屋に至り、一切を頼み置き、玉里九良賀野氏を訪問せしに、門前にて令閨、令嬢の外出せらるゝに出會し、御邸に出勤中の趣に付参邸す。近日御後室様方五名様御帰麗に付、掃除其他大繁忙、伊十院氏御加勢也。東郷氏も参邸あり。三時頃迄話し、帰りがけ警察向ふの床屋にて髪刈、鬚剃り、夫ゟ山形屋にて加治木の出生男児へ祝品富士絹一丈2.65戔にて買ひ、大坂屋にて菓子二三種買ひ、米倉へ頼みある檳榔火鉢見に行しに、主人不在、現品は漆は相當手入しありたるも底の処未だ少しも磨を掛けさるものゝ如くなるに付、畳に疵などつかぬ様よく手入を頼む旨申残し帰宅せり。

三月二十二日（日曜）［天気］晴　［寒暖］暖　［豫記］矢上城趾建碑／除幕式／午後一時ゟ

今朝便通なく、其為か昨日髪摘等の結果か、氣分勝れず。十時過加治木の幹子来り、三時過帰り去る。敏子の着物持帰る為なり。此便にて祝品頼み遣はす。熊野芳子さん、孫さん四人と女中を連れて来訪。タヲル半打、手土産也。病後の衰弱未だ回復せぬ様子に見へたり。今日は午後一時より吉野村矢上城趾建碑式に案内受け居りしも、朝来の不氣分、参列の氣になれす、遂に不参せり。

三月二十三日（月曜）［天気］晴、午後不時大雷雨一過

今日は終日在宅。祐利の墓石の字を練習方なり。午後二時過、天俄かに

曇り、大雷鳴大雨一過、間もなく霽れ上がれり。

三月二十四日（火曜）［天気］晴　［豫記］ベルツ丸呑み始む
［發信］日本画大成發行所／平田猛氏／川上はかき　［受信］宇都宮氏禮状／藤安新□
午後一時過、川村祐三来り、姉の四十九日法要を営むから午後五時頃ゟ来て呉との事なり。承諾を與へ置きしも、氣分悪く不参せり。
終日穏に消日せり。

三月二十五日（水曜）［天気］曇
早朝伊地知峻君来訪。南洲先生書貳幅持参、鑒定を求めらる。一幅は印なけれども難なし。旧苑纔臺の詩なり。一幅は全然ダメなり。しばらく話し帰り行かる。引つゞき久永金光堂楽器店ゟ二名来りて荷造り箱持参、音を直し荷箱に入付け帰り行く。荷造り箱持参、荷造り費、五円五拾戔拂ふ。
女中町へ出る。

三月二十六日（木曜）［天気］雨
終日雨にて家居せり。夕六時玉里公爵御母堂、小松侯夫人、令息等着麗に付、出迎に行く筈之処、風氣分故不参せり。

三月二十七日（金曜）［天気］晴　［豫記］酒　［受信］祐之ゟ振替とゞく／敏子
十時頃出かけ玉里参邸。今日は御機嫌伺迄に名刺を差出し、事務所で十一時過まで話し、夫ゟ歩行にて草牟田墓地入口石屋内野方に立寄り、墓石一基、手水鉢一個頼み、彫鐫ノ文字は唐紙にしたゝめ渡し置く。遅くも来月三日迄に成就方申し置く、夫ゟ明石屋菓子舗に行、かすてら一箱、玉里御邸へ呈上方頼ム。一人て進上の心算なりしも東郷重毅、大迫經富両氏加入させて呉との事なりし故、三人連名の札を付け置けり。夫ゟ大社酒屋にふく娘二升4.40を拂ひ持参頼み、栄文館にて陸地測量部地図五万分一図四枚.52、外國雑誌四月号.80買ひ、米倉國松方へ火鉢の工程見に行く。大坂より一周間計りもしたなら、灰入れの部とゞくならんとの事也。出がけ通運會社にオルガン大口送りの件頼み置く。直くに取り来り呉之由也。

三月二十八日（土曜）［天気］晴　［發信］祐之へ（封）／淑子へ（は）
午前武局にて三十円引出し、武駅前通運に至り、オルガン大口への送付料一円四十戔仕拂ひ、金丸にて菓子二種52戔買ひ、帰途豚五十目30買ひ、栽木鉢十個.60の約束して帰る。

三月二十九日（日曜）［天気］晴　［豫記］鹿新観櫻會
午前武大明神社司鳥集氏に行き、来月五日の祐利一年祭の件頼み、墓石の字の左右等を尋ね、夫より草牟田墓地の石屋に至り、字の配置を示し、四日に建設ノ事に相極め、夫ゟ新照院の岩下氏ヲ尋ね廻りしも尋得ず。中江氏に立寄りしも不在。房村氏より岩下氏の居所を聞き、分明せり。今日は鹿児島新聞社の観櫻會にて城山登りの客、新照院口よりも夥し。帰りにバナ、.32一房買来る。

三月三十日（月曜）［天気］曇、小雨

午前白尾寅千代氏、今般退職帰郷せりとて挨拶に来訪あり。女中町へ出る。

三月三十一日（火曜）［天気］曇、小雨　［豫記］名刺頼む　［受信］よし子

午前町に出、明石屋にて来月四日朝迄にかるかん、高麗餅、木杢かん、型菓子壱箱づゝ、かるかん六箱頼み置き、重箱も二組借りる事に約束せり。夫ゟ図書館に至り、談話筆記21枚を差出し、昼過帰宅せしに、玉里御邸ゟ電話ありしとの事なりき。食後電話を御邸に掛けしに、今夜六時ゟ夕飯下さるゝに付、参邸せよとの返事あり。五時出かけ参邸す。山口平吉、勝目清、山口新吉、東郷重毅、田中栄助、巌崎静吉、邊見某、中江佐八郎、村田經正、河野通久、大丸某、其他御邸関係人々多人数なり。酒酣なる頃、御後室様、小松侯夫人、令息お二人、量子姫席に御入り、御挨拶あり。隠し藝など出で、令息方の御酌などありて、十二分頂戴して御送りの自動車にて帰途に就く。十二時前に帰宅せり。

午前高場印刷屋に名刺百枚頼ム。